

## ジャン・ジョレス論の転回

——Jean-Numa Ducange, *Jean Jaurès* (Perrin, 2024) ——

佐久間 啓

---

ペラン (Perrin) 社の伝記シリーズにフランス社会主義にとって「伝説」の人物が加わった。ジャン・ジョレス (1859-1914) は、日本でこそ知名度は高くないが、フランスでは最も知られ親しまれている社会主義者のひとりである。パリやリヨン、トゥールーズの地図を開けば、その名前はいたるところで見つけられる。ある 2013 年の調査によれば、ジョレスの名を冠したフランスの駅や通り、公園の総数は、ド・ゴールやルイ・パストゥールらに次ぐ 5 位であった。むしろその数は社会主義者の中でトップであった。その一方で、ジョレスはあまりにも「伝説」化された人物である。ドレフュス事件での活躍、フランス統一社会党 (SFIO) の結成、そしてなにより第一次世界大戦前夜における反戦運動と暗殺という悲劇的な結末。しかも、1924 年のパンテオン移葬がその「伝説」化に拍車をかけ、今日では左右を問わず都合よく言及される偉人といった様相である。要するに、その名が「伝説」とともに知られているがゆえに／にもかかわらず、その実像はいまだ定かではないのだ。ジョレスとは何者なのか。本書では今最良の書き手がこの謎に挑んでいる。

ジャン＝ニューマ・デュカンジュは、2024 - 2025 年度においてフランス・ノルマンディー＝ルーアン大学現代史講座教授と、フランス大学学院 (l'Institut Universitaire de France) の准教授 (Maître de conférences) を務めている。専門はフランス革命の歴史オグラフィーとフランス・ドイツ語圏における社会主義思想史ないし運動史である。2009 年にポール・パストゥールの指導のもとで博士号を取得し、以後精力的な執筆活動を続けている。44 歳となった 2024 年で、すでに 10 冊の単著と 12 冊の編著、50 本以上の論文を発表している。また、仏語版ローザ・ルクセンブルク全集の刊行や、トゥールーズ＝ガタリの研究者であるギヨーム＝シベルタン・ブランとともに *Actuel Marx* 誌の編集 (2016-) にも携わっている。

本書 *Jean Jaurès* は、そうした研究活動を通じて今やフランス左派論壇を代表する若手研究者といっても過言ではないデュカンジュが、長年研究の柱のひとつとして取り組んできた

ジョレス研究を一冊の著作として書き下ろしたものである。デュカンジュは、いわばジョレス研究のインサイダーであり、『ジョレス著作集 (*Euvres de Jean Jaurès*)』(全17巻、2000-2023年)の編纂メンバーに加わるかわら、彼自身が選別した著作の英訳版(Ducange et Marcobelli eds. 2021)と独訳版(Ducange Hrsg. 2024)を刊行するなど、ジョレスの学術的・国際的な普及に貢献している。また、研究成果の一部は、*Cahiers Jaurès* 誌掲載の諸論文や Ducange et Burlaud dir. (2018) 所収の「社会主義者のマルクス(1):ジョレスとゲードの場合」(Ducange 2018)などを通して公開されてきた。「反ジョレスの人?」という副題をもつ Ducange (2017) では、フランス・マルクス主義者ジュール・ゲードの生涯を描きながら、そのライバルだったジョレスについても詳しく論じた。本書はしたがって、それらの研究成果と新史料を駆使しながら、「伝説」化されてきたジョレスの実像を「世界史的文脈」(p. 16)から明らかにする試みになっている。

本書は全5部17章(+序論・結論)で構成されている。各部のタイトルは次のとおりである。第1部「哲学から政治へ、共和国から社会主義へ:雄弁家の道(1859-1898)」、第2部「世紀を背負う:抑圧される者に寄り添う知識人(1898-1903)」、第3部「主筆にして党首:第一級の政治指導者(1904-1908)」、第4部「危機との対峙:戦争をなんとしても回避する(1909-1914)」、第5部「ジョレス亡き後のジョレス:後継者たち(1914-2024)」。以上のタイトルからもわかるように、本書の議論は基本的に時系列に沿って進められていく。それでは、デュカンジュが示す、脱「伝説」化されたジョレスとは一体いかなる人物なのか。以下では、まず各部の内容を概観し、その後、「最も包括的で博識な」(p. 407)先行研究(Candar et Duclert 2014; Rioux 2004; Cazals 2017)であっても欠けていた側面を捕捉しようとした本書の特徴を検討しよう。

第1部は、フランス南部タルン県カストルにおける1859年9月3日の出生からドレフェス事件に関与する直前の1898年までの半生を論じる。オック語を耳にしながら育ったジョレスは、その学才を認められたことで、パリの高等師範学校へ進学し、高校そしてトゥールーズ大学の哲学科教師になるというエリートコースを歩む。他方、幼い頃から抱いていた政治への意欲もほんものであった。まだ十分に大学でキャリアを築くこともできた若きノルマリアンは、1885年下院選に共和派として立候補し、最年少議員になる(1章)。2章は、最初の議員生活、その後の落選と博士論文の執筆を経て、社会主義に目覚めるまでの経緯をたどる。3章では、当時の著名な政治家や運動家との比較を通して、社会主義者あるいは「集産主義者」として1893年1月下院に戻ったジョレスの思想的特徴が示される。

第2部は、世紀の転換点におけるジョレスの仕事、すなわちドレフェス派としての活動、マルクス主義者との論争と左派ブロックの形成、そして『フランスの社会主義的歴史(*Histoire*

*socialiste de la France contemporaine*)』の刊行を各章で取り上げる。4章は、ゲード派の沈黙や2度目の落選という憂き目に逢いながらも、ドレフュスの無罪を論証する『証拠 (*Les Preuves*)』を執筆するなど「正義」のために奔走した日々を描く。続く5、6章では、ライン川の東側で修正主義論争が過熱する中、ジョレスがゲードらマルクス主義者の意に反して、急進派(共和左派)との協力体制「左派ブロック」を形成した過程が明らかにされる。7章は、ジョレスが編集を務めた『フランスの社会主義的歴史』の一部であり、かつ自ら筆を執った『フランス革命の社会主義的歴史 (*Histoire socialiste de la Révolution française*)』について言及し、歴史家としての一面に光を当てる。

第3部は、『ユマニテ』紙の創刊と第二インター・アムステルダム大会という困難から、栄光に満ちた1905年、その後のクレマンソーとの対決、そして最後にSFIOにおける復権を論じる。8章は、ゲードらと対立する自らの地位を確立するために日刊紙『ユマニテ』を創刊するものの、その経営はなかなか軌道に乗らず、そうこうしているうちに第二インターから協調路線の放棄とゲード派優位のフランス社会主義統一を勧告されるというジョレス我慢のときを素描する。9章は、ロシア革命から始まる1905年における一転するような栄光、すなわちSFIOの結成と「政教分離法」の制定を扱う。10章は、ドレフュス事件でともに闘った「虎」クレマンソーの反動化に立ち向かうジョレスの姿を描く。11章は、SFIOトゥールーズ大会(1908)における指導的地位への返り咲きを主題にする。

第4部は、左派ブロックの解消とSFIOの結成、そしてクレマンソーの権威主義的統治によって、共和派との協力関係が決裂し、さらにSFIO内の対立派閥やCGTとも強固な関係が築けていない中で、ジョレスが労働運動の弾圧や戦争の危機にいかにか立ち向かったのかを論じる。12章は、国内外を問わず連帯する相手を探すジョレスの苦勞を描くとともに、議会人であることが重視され、ほとんど強調されてこなかった「労働運動の擁護者」としての一面を提示する。13章は、ジョレスが平和と社会主義のための兵制改革を説いた晩年の大著『新しい軍隊』(1911)を取り上げ、その仔細な内容と当時の反応をまとめる。14章は、ジョレスの国際的な視野およびその反植民地主義的な広がりを説明したうえで、雄弁を武器に左右から攻撃される不安定な地位を守りながら、ヨーロッパに戦火が及ぶのを食い止めんと奮闘する姿を描く。15章は、バルカン戦争が勃発し、ヨーロッパ全土を巻き込む戦争も時間の問題のように思われた中、暗殺されるそのときまで平和のために駆け回り、その身を尽くしたジョレス最後の闘いを追う。

第5部は、ジョレス後のジョレス、すなわちフランス社会主義の父とも称される人物がその悲劇的な死後、いかに評価され、いかに論じられてきたのかを扱う。いわば受容史のパートである。まず簡潔に、暗殺直後の追悼から第一次世界大戦中の言及、さらに大戦終結後に

におけるレーニンとの対置、そして社会主義勢力が分裂（レーニン主義かジョレス主義か）する中でのパンテオン移葬（1924）までを振り返る（16章）。移葬後ジョレスは、社会主義勢力を超えて、穏健左派から保守、極右までもが言及する偉人になる。なぜかくも多様な人々はその名を挙げるのか。17章は、戦間期における共産主義者と社会民主主義者の軋轢から始まり、人民戦線での参照、戦後の散発的な言及、ミッテラン期以降の評価の確立と「左翼のド・ゴール」化、そして現代における右派の引用と急進左派の等閑視へ向かう100年の受容史をたどり、時代状況に依存してきたジョレス論の展開に迫る。

本書の結論「世紀の伝説」は、レオン・ブルムという同時代人が去って以降、「相続人」が途絶えていたジョレスの「革命的改良主義」（Scot 2014）という政治的立ち位置を明らかにする。第1にジョレスは、決して社会主義社会の実現という目的を忘れず、そのためには「革命的飛躍」、少なくとも「ある種の断絶の精神」（p. 401）が必要であることを説いた。他方で、大衆を信じることで、たとえ啓蒙や宣伝に時間を要そうとも「協調」（民主的正当性の獲得）を諦めず、安易なラディカリズムになびかなかった。第2にジョレスは、パトリオットとしてフランスの歴史や文化を尊重し、共和政を擁護しつづけた。たとえ急進的な勢力がそれをナショナリズムだと否定しようとも、国家や議会は「具体的な現実」（p. 401）であり、ジョレスにとって社会変革はそこから構想されなければならなかった。要するにジョレスは、「改良と革命」、「急進主義と漸進主義」、「理論と実践」（p. 401）という対立を乗り越えようとした人物であった。

\* \* \*

以上見てきたように本書は、ときにマニアックともいえる記述を含みながら、ジョレスの誕生から死、そしてその後の評価までを論じる浩瀚な一冊である。ページ数は実に460ページに及ぶ。その一方で、本書が提示するジョレス像は一貫している。すなわち、「信念の人（*homme de conviction*）」（p. 16）というジョレス像である。ジョレスは従来「協調」や「融和」の人として知られてきたが、たしかに本書が甦らした当時のコンテクストを踏まえれば、絶えず左右からの攻撃にさらされながら、自らが信じる道を歩きつづけた「信念の人」であった。少数者による革命や、暴力を好まなかったジョレスは、多様な人々と連帯することに柔軟であり、ときに譲歩することを恐れなかった一方で、自身の目的を放棄することはなかったのである。本書の指摘にしたがえば、その背景には、ジョレスの進歩主義的あるいは楽観主義的な思考があったのだろう。社会主義体制が必ず訪れるという確信がそうした柔軟な態度を可能にした。本書によればジョレスは、一見すると妥協的な人物や軟派のように思われ

るかもしれないが、実際は何が社会革命のために役立つのかを考え、実践しつづけた社会主義者である。

本書の特徴は、以上のある種ラディカルなジョレス像を打ち出した点にある。ただし、その解釈すべてが本書のオリジナルというわけではない。というのも、本書が「結論」の重要な箇所ですでに引いた Scot (2014) が、すでにそうしたジョレス像の提示を試みていたからである。ジョレス研究のアウトサイダーといえる——少なくとも、『ジョレス著作集』の編纂には関わっていない——ジャン＝ポール・スコットは、マルクスないしマルクス主義からの影響を軽視する先行研究を批判し、ジョレスが持続的な革命的展望の下で行動した「革命的改良主義」者だったと論じた。それまでの穏健なジョレス像を一変させるような Scot (2014) は、必ずしもジョレス研究のインサイダーから評価されたわけではなかった。ところが、デュカンジュは Scot (2014) を激賞し (Ducange 2015)、その後の著作においても参照してきた (cf. Ducange Hrsg. 2024: 16)。すなわち明言こそされていないが、本書は、ジャン・ジョレス論の転回を促したアウトサイダーの解釈 (Scot 2014) をインサイダーが引き継ぎ、発展させたものなのである。

本書によってジョレス論は転回したのか。あるいはまだその半ばなのか。いずれにせよ、ジョレスや社会主義思想、フランス近現代史に関心をもつ者にとって必読の一冊である。

## 参考文献

- Candar, Gilles et Vincent Duclert, 2015, *Jean Jaurès*, Paris: Fayard.
- Cazals, Rémy, 2017, *Jean Jaurès. Combats pour l'humanité*, Portet-sur-Garonne: Éditions Midi-Pyrénéennes.
- Ducange, Jean-Numa, 2015, « Scot Jean-Paul, Jaurès et le réformisme révolutionnaire, Paris, Éd. du Seuil, 2014, 361 p., 21 € », *Vingtième Siècle. Revue d'histoire*, n° 128, p. XVI.
- , 2017, *Jules Guesde L'anti-Jaurès ?*, Paris: Armand Colin.
- , 2018, « Le Marx des socialistes (1) : le moment Guesde-Jaurès », in Jean-Numa Ducange et Antony Burlaud dir., *Marx, une passion française*, Paris: La Découverte, pp. 29-42.
- , 2024, *Jean Jaurès*, Paris: Perrin.
- Ducange, Jean-Numa Hrsg., 2024, *Jean Jaurès oder: Sozialismus wider die Kriegsgefahr*, übersetzt von Andreas G. Förster, Berlin: Dietz Verlag Berlin.
- Ducange, Jean-Numa et Antony Burlaud dir., *Marx, une passion française*, Paris: La Découverte.
- Ducange, Jean-Numa et Elisa Marcobelli eds., 2021, *Selected Writings of Jean Jaurès On Socialism, Pacifism and Marxism*, translated by David Broder, †London: Palgrave Macmillan.

Rioux, Jean-Pierre, 2005, *Jean Jaurès*, Paris: Perrin.

Scot, Jean-Paul, 2014, *Jaurès et le réformisme révolutionnaire*, Paris: Éditions du Seuil.